VOLUNTEER GUIDE For Our Sustainable Future

ボランティアがつくる持続可能な未来

TOKYO 2020
応援プログラム
持続可能性

東京2020応援プログラムはボランティアがつくる持続可能な未来事業に付与されています

持続可能な未来をつくるボランティアのためのガイド
～ボランティアを受け入れるすべての団体の皆さんへ～

発行：地球・人間環境フォーラム
〒111-0051　東京都台東区蔵前3-17-3 蔵前インテリジェントビル8階
TEL：03-5825-9735　FAX：03-5825-9737

企画：SUSPON（持続可能なスポーツイベントを実現するNGO／NPOネットワーク）ボランティア部会

持続可能なスポーツイベントを実現する
NGO/NPOネットワーク
Sustainable Sport
NGO and NPO Network

地球環境基金

本冊子は、平成29年度独立行政法人
環境再生保全機構地球環境基金の
助成を受けています

持続可能な未来をつくる
ボランティアのためのガイド

～ボランティアを受け入れるすべての団体の皆さんへ～

東京2020大会をきっかけに
未来のボランティアスタンダードをつくる！

CONTENTS

東京 2020 大会をきっかけに …… 3

なぜ持続可能性が大切なのか …… 4

持続可能な未来をつくるボランティアとは？ …… 5

団体紹介 1（NPO iPledge） …… 6

団体紹介 2（NPO 地域環境デザイン研究所 ecotone） …… 8

団体紹介 3（NPO 法人 ezorock） …… 10

受け入れ側の Check Point！
ボランティアを受け入れる側の心がけ …… 12

ボランティア受け入れ側の声（座談会）
「ボランティア活動が社会を変えるきっかけに」 …… 14

参加側の Check Point！
ボランティアに参加する側の心がけ …… 16

ボランティア参加者の声
「活動をとおして見えてくること・感じること」 …… 18

ボランティアがつくる持続可能な未来（二宮雅也さん） …… 20

ボランティア活動に関する主な団体・情報源リスト …… 22

SUSPON（サスポン）（持続可能なスポーツイベントを実現するNGO／NPOネットワーク）

2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会を持続可能な大会とすることをきっかけに、その後の東京・日本、ひいては世界の持続可能な社会づくりにつなげることを目指し、関心を寄せるNGO／NPOがお互いに情報交換をし合い、自ら当事者として活動し、関係団体や企業に働きかけていくことを趣旨としたネットワーク団体です。SUSPONでは、「市民参加」「横のつながりを活かす」「対話の場をつくる」という3つの視点に重きを置いています。
詳しくはhttp://suspon.net/をご覧ください。

SUSPON参加団体
NPO iPledge（アイプレッジ）／A SEED JAPAN／NPO地域環境デザイン研究所ecotone／NPO法人ezorock／国際環境NGO FoE Japan／環境パートナーシップ会議（EPC）／認定NPO法人 環境リレーションズ研究所／Climate Youth Japan（CYJ）／グリーン購入ネットワーク（GPN）／グリーン連合／CSOネットワーク／持続可能な社会をつくる元気ネット／水Do!ネットワーク／認定NPO法人 スペースふう／ 地球・人間環境フォーラム／日本自然保護協会（NACS-J）／日本野鳥の会

東京2020大会をきっかけに

SUSPONボランティア部会

21世紀に入り、環境・経済・社会のすべての分野で深刻かつ複雑な問題が発生し、その解決策はもちろんのこと、これからの社会のあり方が問われ続けています。持続可能な未来をつくるためには、私たち一人ひとりが多くの情報を得て学ぶこと、そして具体的な行動が必要不可欠です。それには想像力や自主性、それぞれの立場で責任ある行動や選択を行なうことが求められます。間もなく訪れる2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京2020大会）は、持続可能な未来を創造するための転換点にしなければなりません。

東京 2020大会会期中に国内外から東京を訪れる人はのべ 1,000万人に上る見通しであり、開催に必要なボランティアスタッフは、7万人が活動したとされる 2012年のロンドンオリンピックを上回り、過去最大規模になるとみられています。ボランティアスタッフが必要なのは東京近郊だけではありません。地方でも各国の選手団が事前合宿などを行なうことを考えると、東京以外の日本各地でボランティアスタッフの確保が必要です。東京2020大会で想定されるボランティアの種類は、選手や観客の誘導・案内、通訳、警備や記録係の補助、チケットの確認、ごみの分別・リサイクルなど幅広いものとなりますが、皆さんがもしこの大規模な人数のボランティアスタッフを受け入れる側であるとしたら、どのようにコーディネートされるでしょうか？ あるいは参加者の立場だとしたら、どのような心構えで参加されるでしょうか？

これだけ多くの人が多くの時間を費やして関わる一生に一度の機会だからこそ、参加したすべてのボランティアスタッフが笑顔を絶やさず、また支え合う・補い合うことの大切さを認識し、「持続可能な明るい未来を共につくる学びの機会」となることが私たちは望ましいと考えています。持続可能な社会にするために必要な「自分の頭で考える力」「自分の能力を発揮して実現する力」。これはボランティア活動を通して実感し、学びとることができるものです。指示されたことだけをこなすのではなく、自分の頭で考えてよりよい提案をし、専門的な能力や時間を進んで提供する。そんな自発的な気持ちのある人々が参加してくれることで、よい雰囲気がつくられるのです。だからこそ受け入れ側はボランティアを無償の労働力にするのではなく、「学び」の機会をつくる努力を怠ってはいけません。

本書では、東京 2020大会をはじめとした、多くのボランティアを必要とするお祭りやイベントのボランティア活動の基礎となる考え方を整理すると同時に提言しています。実際に 90年代前半から多くのボランティアをコーディネートしてきた NPOや、全国で年間数千人が参加するイベントのボランティアコーディネートを行なう団体が作成したチェックリスト、また受け入れ時に考慮すべきポイントなども収録しています。

ボランティア活動を通して社会を変える、そしてつくる。そんな機会の創出に本書を活用いただければ幸いです。

なぜ持続可能性が大切なのか

星野智子（環境パートナーシップ会議）

地球と私たちの社会は今、持続不可能になっています

私たちが暮らしている地球上の環境は、豪雨、大型ハリケーンや干ばつなどの異常気象や生物種の減少などによって、悪化の一途をたどっています。気候変動や生物多様性の喪失、資源の枯渇などの問題は、大量の生産・消費・廃棄など人間の社会・経済活動が原因だと認識されています。これに対処するための取り組みが各地・各所で行なわれているものの、地球と私たちの社会の持続可能性は危ぶまれています。

このような状況下、国際オリンピック委員会（IOC）では、1994年に「スポーツ」「文化」に加え、「環境」をオリンピック精神の第三の柱とすることを宣言しました。また、2014年12月に採択した「Agenda2020」ではオリンピックにおける持続可能性の重視がより明確化され、持続可能な大会の重要性を強く打ち出しています。日本国内においても温暖化、生物多様性喪失、廃棄物問題などの環境問題に加え、自治体消滅の危機や労働人口の減少、少子高齢化、一次産業衰退による里地里山の多様性低下、さらには災害への対応、震災復興など、持続可能性に関する課題が山積しています。

持続可能性を保つために

地球上のすべての人が健康で平和に、安全に暮らせることを誰もが願っていることでしょう。自分たち世代だけでなく、将来世代にとってもずっとそうなることが、「持続可能性を保つこと」です。持続可能性とは環境保全と経済発展、そして社会の多様性・豊かさの維持を同時に実現することを指します。持続可能性を保ち、いつまでも地球上で暮らせるようにするには、以下を認識することが大切です。

◆ 自然環境が私たちの命を守っている

私たちは自然の恵みによって生かされています。小さな微生物も含めた生物多様性の中でつくられた食物が私たちの食卓に運ばれ、森林や河川・海や湖沼の働きによって大気や水が浄化されています。自然環境に包まれながら、私たちは肉体的にも精神的にも健康を保つことができます。このように私たちの暮らしはすべて自然が生み出した物質や機能に支えられており、これらが破壊や減少につながる行為を続けることは、私たち自身の暮らしを脅かすことにつながります。

◆ 将来世代のことを考える

私たちが今生きていられるのは、私たちの祖先がたくさんの自然や知恵を残してくれたからです。そのことに感謝しながら、私たちもそれを将来世代に引き継ぐ責任があります。

◆ 地球は有限

地球上の資源や環境容量には限りがあります。生物多様性に異常が生じることで、生態系のバランスが崩れ、自然資源として活用する機会を失うことにつながり、回復させるためにはたくさんの費用と時間がかかります。私たちは限られた資源を公平に長く使うために、世界の人たちと話し合い、知恵を出し合っていく必要があります。よりよい未来のために開発は必要ですが、自然環境を破壊することに加担すると、その被害はまた私たちや将来世代に影響してきます。

持続可能性は、私たちがいつまでもどこでも健康的に平和に暮らすために必要です。スポーツや文化を楽しむ、災害時に助け合うことも含め、あらゆる社会・経済活動を行なう上で大事な考え方です。

このような考え方を普及するために、私たちは一人ひとりが自発的に行動することが重要だと考えています。社会の課題解決に向けて行動できる人が増えることを願って、持続可能性に配慮したボランティア活動を広げていきたいと思っています。

持続可能な未来をつくるボランティアとは?

地球環境や身近な自然環境を守る活動が広がることで、環境は保全され、活動する人や周囲の意識も変わっていき、よい環境を保とうという気持ちが社会の中に広がっていくでしょう。ここからは、いくつかのボランティア活動を紹介しながら、ボランティアを受入れる側も参加する側も役立つ情報を紹介します。環境保全のためのボランティア活動は、ごみ削減、自然環境・野生生物保全、温暖化防止、環境教育、国際協力など様々あります。また、川や里山などの現場の活動だけでなく、現場を支える事務作業や広報などあらゆる活動が含まれますので、自分に合った活動を見つけてみてください。

皆さん、考えてみてください！

持続可能な社会に向けてどんなことができると思いますか？

高度成長期だった前回（1964年）の東京大会とは違い、東京 2020大会では持続可能な社会づくりの視点から、「先進国として次の時代に何を残すか？」を示すべき時にあります。

温暖化対策・資源活用の事例として、市民が持ち寄った携帯電話やパソコンなどの小型家電から金属を抽出しメダルをつくるプロジェクトや、大会で福島県の再生可能エネルギーを使う、さらには前回の東京大会で壊してしまった自然を取り戻し、自然と共生する社会づくりへの取り組みなど、世界に示すことができる事例はいくつもあります。

従来のような国による主導に頼らず、私たち市民自らが創造し、参加する新しい形をつくっていきませんか？ 未来のために、ぜひ一人ひとりのイマジネーションを！

団体紹介 1

世界は決意でできている。

NPO iPledge（アイプレッジ）

● 団体概要

● 設立：2014年2月　● 代表者：羽仁カンタ

● 主な活動地：全国各地の野外音楽フェスティバル、東京・大阪など都市圏中心のフードフェス、鎌倉・逗子・葉山地域の海水浴場、千葉県の鴨川地域など。

● 主な活動内容

フジロックフェスティバル、サマーソニック大阪など、年間約30本の様々な野外音楽フェスを中心に、イベントや海岸での環境対策活動を企画し、ボランティアの方と共に実施しています。私たちの活動は「ごみ拾い」ではありません。ごみをポイ捨てする人がいて、そのごみを拾う人がいる。そのような構図のままでは、社会はいつまでも変わらないと考えているからです。誰かがごみを拾うのではなく、イベントに参加するすべての人々が、自分たちの手でごみや資源を分別できるようにすることで、クリーンでピースフルなイベントをつくりあげることを目指しています。また、次世代を担う若者たちに、非日常なイベント空間での体験や気づきを、日常にも持ち帰り意識・行動してほしい、そんな思いで活動しています。

団体のポリシー

- 「ボランティアがごみを拾う」のではなく、来場者のマナーを変えるしくみづくり
- 非日常のイベントでの体験を日常のライフスタイルの変化につなげる
- 共感できる体験、自分ごととして捉えられる体験を生む
- スタッフもボランティアも来場者も、誰もが対等
- 本気で、本音で向き合い支え合うチームワーク

主な活動実績

年間活動イベント：約30本　年間ボランティア参加人数：約2,200人

年間活動日数：約200日　ボランティアコーディネーター人数：約45人

オリジナルごみ袋を配布！

1994年　レゲエ・ジャパン・スプラッシュで活動開始

1998年　フジロックフェスティバルで活動開始
→ごみ・資源の分別ナビゲート、オリジナルごみ袋の配布、キャンペーンブース、ステージアピールを展開

2005年～2012年　ap bank fes
→8年かけて、ごみ・資源は10分別、古古米からごみ袋作成、フードエリアの全面リユース食器導入を実現

2014年～　花見時期の都内公園、海水浴場、フードフェスなど
→ 自治体や多様なイベントとの連携、活動の幅が広がる

ごみの分別をサポート

ボランティア育成の工夫ポイント

Point 1
6～12人の班をつくりチームで活動

普段なら接することのないような人とも、出会いやコミュニケーションを大切にすることで視野や価値観を広げる機会を提供します。同時に個人プレーではなく、仲間で協力して一つのことをやり遂げるチームワークの経験を届けたいと思っています。

Point 2
ボランティアの個性を活かした参加型の活動

単なる「人手」と捉えるのでなく、その人の経験や性格、参加した動機や思いを活かすことができる役割を担ってもらいます。また、ボランティアからの提案や意見を受け入れ、活動に反映しています。

ボランティアはプロのスタッフや専門家ではないからこそ、来場者が親しみをもてる存在

Point 3
活動の意義や成果を伝える

活動を通じて何人の来場者に活動の意義を届けることができたか、どれだけの量のごみを削減できたかなど、ボランティアの皆さんが、自分の存在が活動やイベントにどんな影響を与えることができたのかを理解・実感してもらえるように工夫しています。

←ボランティアが笑顔でコミュニケーションをとることで来場者もポジティブな気持ちに。イベントの雰囲気やマナー向上にも

➡初対面のボランティア同士が互いに協力して活動し、意見を出しやすい環境をつくっています

団体紹介 2

リユース食器を活用し「脱・使い捨て宣言」

NPO地域環境デザイン研究所 ecotone（エコトーン）

● 団体概要

● 設立：2001年10月　● 代表者：太田航平
● 主な活動地：関西を中心に全国の祭りやイベント会場での活動を展開しています。

● 主な活動内容

持続可能な社会をデザインするための調査研究や実践活動を市民の立場から展開する環境NPO／NGO。現在の大量生産・大量消費・大量廃棄の社会システムの変革を目指し、ライフスタイルの見直しを図るなど、環境共生型まちづくりを推進しています。主な活動として展開する祭りやイベントにおける使い捨て容器ごみの削減につなげる“リユース食器”を活用した環境対策は、日本三大祭である祇園祭でも大きな成果を上げ、全国に広がっています。

団体のポリシー

- そもそもごみの出ない仕組みづくりを非日常から日常へ
- 市民・事業者・行政などとのパートナーシップ
- リデュース／リユース優先社会の構築
- スタッフも来場者もボランティアもみんなが学べる機会の創出
- “気づき”を“引き出す”アプローチ

主な活動実績

年間活動イベント：380本　年間ボランティア参加人数：約3,500人
年間活動日数：約300日　ボランティアコーディネーター人数：約130人

2000年	大小様々な祭りやイベントにおける容器包装ごみの組成調査を開始
2001年	ドイツにおけるリユースをキーワードとした容器包装ごみ削減プログラムを視察
2003年	リユース食器を活用した環境対策プログラムの開発開始
2004年～2005年	社会実験を繰り返し、リユース食器を活用した環境対策を事業化
2005年～現在	ボランティアスタッフと共に年間100万食を超える使い捨て容器の削減に取り組む

リユース食器を活用

祇園祭で環境対策！

ボランティア育成の工夫ポイント

Point 1
きめ細やかな事前研修の実施

当日ボランティアを受け入れるリーダーの研修を定期的に実施しています。また、当日ボランティアに対しても事前の活動を受け入れるなど体制を整え、なるべく色々な経験が積めるよう工夫しています。

定期的に行なわれる事前研修の様子。熱心に説明に聞き入る参加者の表情が印象的

Point 2
活動体験をとおした主体的な振り返りと課題解決

活動をとおして自身がどう感じたのかをしっかりと振り返り、次の活動や別の機会に活かしてもらえるよう、必ず終了時に小グループに別れ意見交換を行なうプログラムを組んでいます。

Point 3
自分ごとから社会ごとに

問題意識の醸成のみならず、身近な人や社会に対して発信し、課題解決に結びつけられるかを大切にボランティアスタッフの皆さんを個別サポートしています。

現在の事業の軸となるリユース食器システム。使い捨て容器からの脱却を図ります

Point 4
自身の活動だけでなく全体を見渡す視野を

祭りやイベントでの活動は ecotone のボランティアスタッフであったとしても、来場者から見ればスタッフに変わりありません。みんなでその場をつくっていることを認識し、対応できるよう事前に活動視野を広げる研修を行ないます。

小さな子どももしっかり環境対策。ボランティアスタッフの顔も思わずほころびます

団体紹介 3

Do It Yourself 自分たちの未来は、自分たちの手でつくる

NPO法人 ezorock（エゾロック）

NPO法人 ezorock

● 団体概要

● 設立：2001年　● 代表者：草野竹史　● 主な活動地：北海道

● 主な活動内容

北海道各地から集められた地域づくりや環境保全の現場が抱える課題に対して、10代後半から30代までの若者が、主体的に考え、行動し、解決を目指しながら自らを成長させていくためのコミュニティの運営を行なっています。これまでに廃棄物、都市交通、自然保護、森林資源の活用、防災・震災支援、子どもの教育など、13を超えるプロジェクトが創出され、毎年2,500人以上の若者が北海道各地の現場に足を運び活動を展開しています。その後、様々な活動の経験をステップアップに、NPOや地域づくりの現場に就職し、担い手として活躍する人材も多数輩出しています。

団体のポリシー

- Do It Yourself　自立と共存
- ROCK THE LIFE, ROCK THE FUTURE　自らの人生を変化させて、未来を変える
- 対等な議論
- チャレンジできる環境
- 1人の100歩よりも100人の1歩を

主な活動実績

年間活動イベント：293回

年間ボランティア参加人数：活動会員239人、のべ2,579人

年間活動日数：359日

ボランティアコーディネーター人数：5人

2001年	国際青年環境NGO A SEED JAPANの北海道チームとして「ezorock」が誕生、「EARTH CARE」活動開始
2006年	「環境NGO ezorock」に改名
2007年	「RSRオーガニックファーム」活動開始
2011年	「サイクルシェアポロクル」「被災地支援（釜石）」「ふくしまキッズ北海道ボランティア」活動開始
2013年	NPO法人格取得、「プロジェクトNINOMIYA」「大雪山国立公園旭岳自然保護プロジェクト」「ボラ旅北海道」活動開始
2016年	「石狩体験キッズチポロ」「澄川乾燥野菜研究所Sumi Lab」活動開始

オーガニック野菜づくり

自由に自転車の貸出・返却が可能！

旭岳にて

ボランティア育成の工夫ポイント

Point 1 チームで、100点を目指す

チームビルディング研修を行ない、コミュニケーションや参加者同士の強み・弱みを把握し、個性を発揮できる環境を整えています。

Point 2 プロセスを大切にする

会員専用SNSにより、常に意思決定のプロセスが見える状態を維持しています。

Point 3 会議の効率化を図る

ファシリテーター、タイムキーパー、記録など、会議の進め方に関するトレーニングを実施し、効率的で質の高い会議づくりを心掛けています。

Point 4 「人」を育てる「人」になる

自ら得たことを次の世代に引き渡していくために、ノウハウの共有化と振り返り、引き継ぎを重視しています。

ボランティアに参加してみた感想や今後の目標を付箋に。それぞれがこの日の思いを持ち帰ります

年齢層やバックグランドは様々でも、すぐに打ち解け合って協力し合えるのがボランティアの魅力

RISING SUN ROCK FESTIVAL 2017 in EZO（RSR）の会場内で環境対策活動を実施。約200人のボランティアスタッフが参加しました

受け入れ側の

Check Point！

ボランティアを受け入れる側の心がけ

ボランティアスタッフに楽しく安全に活動してもらうためには何が必要か。
指示されて動くだけではなく、情報や状況を把握し、
自分で考えて行動してもらうためのチェックポイントをまとめました。

1 活動の意味・自分の役割を理解してもらう

- ☐ 活動の特徴や1日の流れ、役割分担、注意事項を事前のみならず当日も伝える。
- ☐ ボランティア一人ひとりが役割をもてるようにスケジュールや体制を組む。
- ☐ ボランティア活動の内容や責任の大きさに応じて説明会や交流会を実施。事前に不安を解消し、安心して参加できる環境をつくる。
- ☐ 受け入れ団体・運営団体の紹介パンフレットなどがあれば用意する。

2 気持ちよく活動してもらうために必要なこと

- ☐ 休憩、お弁当、水分補給、体調管理に気を配る。
- ☐ 天候を予測して必要な装備を用意する。
- ☐ 対等な立場で話す。上から目線で指示しない。
- ☐ ボランティア同士が交流できる時間をもつ。一体感やチームワークを大切に（1人ではできないこともチームで協力することで実現できる）。
- ☐ 集合写真を撮り、SNSなどを使い瞬時に共有する仕組みをもつ。

3 ボランティアの自発性を引き出すには？

- ☐ 天候や来場者数など、正しくかつ適切な情報を提供する。
- ☐ ボランティアに意見や感想を求めてみる（話すことで気づきが生まれ、仲間の感想を聞くことで視野が広がることも）。
- ☐ 主催・運営側からのリクエストだけでなく、ボランティアからの相談には親身に耳を傾ける。
- ☐ 必要に応じて活動や運営体制へのアンケートをとり、改善につなげる。

4 当日の雰囲気づくりを大切に

- ☐ 例えば6～12人の班をつくり、年齢や性別などバランスよく出会いや協働の場を形成。
- ☐ 個人プレーではなく、参加者が同じ目的を共有し活動する場を演出する。
- ☐ 構成メンバーを考慮し、1人で初参加した人も馴染めるよう配慮する。
- ☐ アイスブレーキングなどの手法を使いボランティア同士が打ち解け合えるように工夫する。
- ☐ ボランティアを名前で呼ぶ。

5 活動の成果や感謝の気持ちを伝える

- ☐ 活動中の写真や全体での集合写真、利用者・来場者・スタッフの声といった反応を事後メールなどで届ける。
- ☐ 活動が終了したあとも連絡を取り、振り返りの場やアンケートなどを作成する。
- ☐ 次の活動やイベントを紹介し、お誘いする。

6 トラブルを防ぎ、運営側も気持ちよく活動するために

- ☐ ボランティアに任せっきりにしたり1人にせず、スタッフが共に行動する。
- ☐ 活動においてのルールや注意事項は、何度でもしっかりと伝える機会をもつ。
- ☐ 受け入れ団体のニーズと合わない場合や安易なボランティア活動者はお断りすることも大切。
- ☐ 未成年の帰宅時間は安全に帰ることができるよう配慮する。

7 リスクマネジメントを行ない事故を回避

- ☐ 役割分担や責任体制は明確か、責任者は常に最悪のシナリオを考えて動く。
- ☐ 有事の際の避難経路を明確にして運営スタッフは頭に入れておく。
- ☐ 当日の各担当部署との連絡体制を万全にし、円滑なコミュニケーションをとる。
- ☐ コーディネーターマニュアル、活動運営体制などのマニュアルや方法を記した冊子をつくり運営スタッフで共有。

8 ボランティアが学びや気づきを得るために

- ☐ 否定的な言葉を使わない。
- ☐ ボランティアが指示待ちにならず、自ら気づきや提案が生まれるようコーディネートする。
- ☐ ボランティアの参加動機や思いを聞いてみる。

VOICE

ボランティア受け入れ側の声

2020年に向けた座談会

「ボランティア活動が社会を変えるきっかけに」

環境パートナーシップ会議の星野さんを進行役に、ボランティアと共にイベントの環境対策に取り組む団体の代表陣が、ボランティアの魅力から求めるボランティア像、運営側がどうあるべきかなど、東京2020大会を見据えて熱く語りました。

環境パートナーシップ会議
星野智子 さん

NPO iPledge
羽仁カンタ さん

NPO地域環境デザイン研究所 ecotone
太田航平 さん

NPO法人ezorock
草野竹史 さん

ボランティア活動のやりがいって？

星野：さっそくですが、活動を通してみんなが目指している社会像を教えてください。

羽仁：簡潔に言うと、誰もが対等な参加型の社会。それは格差が是正されてフラットになることで実現すると思っていて、東京2020大会で11万人ものボランティアが男女、宗教、国籍の違いを越えて一緒にイベントを盛り上げる状況は、まさにフラットな状態だと思う。だから東京2020大会が、社会をフラットにするきっかけになればいいなと思っています。

太田：僕は市民の立場で行動することを重視していて、公平な社会をつくるためには市民の参加が不可欠だと思うから、一人ひとりが学んだことをその先どう活かせるかを、みんなが考えられる社会になることが理想です。

草野：これはezorockができたきっかけでもあるけど、主体的に行動できる人を増やして、みんながアクションできる社会になるのが理想かな。その点ごみ問題は、当事者意識を引き出す最適なツールだと僕は感じています。

星野：ありがとうございます。自ら社会にコミットして、自分たちの手で未来をつくることに重要性を感じているのは共通ですね。東京2020大会がそのきっかけになればいいよね。じゃあ、みんなの活動におけるやりがいは何でしょう？

草野：フェスのごみ問題に取り組んで17年経つけど、汚かった会場が年々きれいになるのを見て、本当に社会は変えられると感じた。その変化を見続けられているのはやりがいとして大きいよね。

太田：みんなで一つの課題を共有して一緒に何かを変えていく、またはつくり上げていく過程がボランティア活動の魅力であり、学びでもあると思う。

羽仁：僕はちょっと違って、社会的な変化ももちろん大事だけど、ボランティアに参加する若者の成長が見られた時が何より嬉しい。あと僕らがリーダーとして社会を変えられるんだって言い続けることで、共感してくれる人が増えていくのはやっぱり嬉しいよね。それが僕たちの役割でもあると思うし。

星野：主体的にコミットすることでの達成感が、大きなやりがいにつながっていそうだね。

お金には変えられない価値がある

星野：ちょっと視点を変えて、よく「アルバイトとボランティアの違い」みたいなことが言われますが、その点はどう思いますか？

羽仁：圧倒的に違うのは、ボランティアは個人が何らかのテーマのもと主体的に自分の時間を提供するわけだから、どうすればよりよくなるかを自分で考えて行動する要素が、アルバイトより強いと思う。

星野：私が一つ感じるのは、お金には変えられない価値があるのがボランティアかなと。報酬では得られない出会いや価値が自己成長につながって、その先にある自分の夢や目標を見つけることにもつながる。

太田：もちろんアルバイトでも違う文化を理解する機会はあるかもしれないけど、ボランティアは金銭に寄らない分、できることの伸びしろや創造性が違うとは感じる。

草野：僕は人間の本来の力が最大限に引き出されるのは、ボランティア以外にないと思う。今やっている活動がアルバイトだったら、こんなに大きなパワーを生み出せていないかもしれない。仕事だとどうしてもいろいろ考えすぎちゃうけど、型にはまらず、本来もっているパフォーマンスを発揮できるのがボランティア活動の場なんだと思う。

太田：金銭の価値に置き換えると自分に制限をかけるんだろうね。無報酬で動くっていうことは自分に制限をかけない分、挑戦もしやすいのかもしれない。

羽仁：そうだね。アルバイトで休憩時間にもっと活動したいっていう人は少ないかもしれないけど、ボランティアは普通にいるからね。

星野：時給があると時給の枠でセットされるのかな。

羽仁：そう考えると、オリンピック・パラリンピック（以下、オリンピック）はボランティアを入れる規定があるという意味では素晴らしいよね。社会をよくしていく一つのきっかけにしようという理念がみてとれる。

ハードルを超えた先の未来をつくる

星野：東京2020大会でボランティアをコーディネートする側に回る人も大勢いると思うけど、運営側にはどんなことが求められると思いますか？

草野：例えば不純な動機、遅刻、いろんな人がいると思うけど、それも受け止めた上でマイナスな空気をつくらず、目標のレベルまでクオリティを維持することが運営側のミッションじゃないかな。

羽仁：一定のクオリティまで引き上げるコーディネートをすることは、運営のおもしろさでもあるよね。だからこそ運営側は、例えば10人に対して1人のリーダーをつけるとか、小さな単位で人を見る仕組みをつくる必要があると思う。参加者のモチベーションを大事にして、無償の労働力にしないためにも。

太田：僕はどんなチームをつくりたいかを運営側は事前にしっかり伝えて、当日は入りすぎないコーディネートを心がけてほしいと思います。例えば何かが起きても、チームの中で解決できる流れを上手く引き出すような。できるだけ参加者自身が自分で学び取って持ち帰れるようにすることが重要かな。

星野：最近ボランティアとして地元の祭りに参加して感じたのは、何を求められているかを伝えてほしいということ。それがモチベーションにもつながるから、運営側の人には「こうしたい！」というビジョンは伝えてもらいたいなと思いました。最後に、東京2020大会でボランティアとして参加する皆さんにはどんなことを望みますか？

草野：オリンピックでボランティアをするからこそ得られる経験が必ずあるはずだから、そこで得たことを次世代の人に伝えていってほしいと思います。

羽仁：大規模なイベントになるほど、環境負荷につながることも忘れないでほしいです。ボランティアがごみを一つ捨てれば11万個のごみが出る。組織委員会も減らす努力をする必要があるし、何より一人ひとりの行動一つで環境破壊にも環境保全にもつながることを理解して参加してほしいと思います。持続可能な社会をつくるためにも、環境のことを理解できるボランティアを増やしたいので。

太田：オリンピックって選手村もそうだし食材調達やごみの問題、ある意味社会の縮図的な部分があるから、そこで起きたことや克服する課題は絶対にいい経験になると思う。それが今後何に結びつくのか、自分なりに考えて参加してもらえればいいんじゃないかな。

草野：ボランティアだからこそ起こる小さなトラブルはたくさんあると思うけど、それを乗り越える楽しさも一つの醍醐味だよね。

星野：みんなで協力してハードルを乗り越えるという成功体験をつくるチャンスでもある。

羽仁：確かにオリンピックのボランティアって、会社を何日も休むとか日本の常識で考えてもハードルだと思う。でも50年に1度だし、そのハードルを乗り越えた先の日本を一緒につくっていければいいよね。一人ひとりがハードルを乗り越えることで社会全体が何かを乗り越えられる力が、ボランティア活動にはあると思います！

参加側の

Check Point！

ボランティアに参加する側の心がけ

ボランティアにも様々な種類があり、興味のある内容も人によってそれぞれだと思いますが、
ここに書かれていることはどんなボランティアにも共通することです。
参加するにあたりどんなことに注意し、心がける必要があるかをまとめました。

1 自発的な気持ちを大切に

□ 目的を明確にする！
自分が参加する活動は、どのような目的で何を行なう活動なのかを理解する。

□ 意見や提案を伝えてみる
意見や提案、やってみたいことがあれば積極的にスタッフに伝えてみよう。

□ 無理をしない
担当の役割はありますが、体調や体力に応じて休憩をとり、楽しく活動できることを大切にする。

□ 真面目な態度で臨む
参加動機は何であれ、活動に参加することを決めるのは自分自身。
不真面目な態度では活動をお断りする場合も。

2 対等な接し方を心がける

□ ホスピタリティの気持ちを大切に
ボランティアはアルバイトや仕事とは異なり、誰かに一方的にサービスを提供するための人員ではありません。ホスピタリティ精神を忘れない心がけを。

□ 親しい友人と接する気持ちで
スタッフやほかのボランティア、来場者など一般の方と接する場合は、下から目線でへりくだったり上から目線で命令するのではなく、親しい友人と接する気持ちで対応しよう。

3 責任をもって活動する

□ 遅刻や早退をしない
受け入れ団体のほか、活動に関係する多くの団体・企業がボランティアを受け入れるための事前準備をしています。約束したら土壇場のキャンセルや自分勝手な遅刻・早退は厳禁！

□ 節度ある行動を
ボランティアも運営スタッフの一員。一般の方から見ると、活動中はボランティアも正規のスタッフと同じように見られます。一般的なルールを守り、節度ある行動を心がけよう。

□ 勝手な判断や行動はしない
万が一トラブルが起きた場合には、最終的にトラブルを起こした本人の責任にもなります。迷うことや困ったことがあれば、勝手な判断や行動は控えてスタッフに伝えて相談しよう。

☆ボランティアとして参加する人がおさえておくべきこと！

- 自分の体力の限界を把握し、必要に応じて休憩や休みをとりたいと言う。
- 会場のレイアウトやボランティアの活動拠点になる場所を把握しておく。
- 当日の持ち物、集合時間などを把握しておく。
- 前日にしっかり睡眠をとって、朝食を食べてから参加するように心がける。
- 当日、自分が行なう活動内容を理解しておく。

（把握していない場合は前日までに資料やウェブサイトで活動内容を把握）

- ボランティア活動を通して学びたいことがあれば明確にしておく。
- 指示されたことをやるだけではなく、どうすればよりよくできるのかを考えて、提案する力をもつ。
- 自発的に参加する気持ちを忘れない。
- 誇りをもって活動する。

（自分にしかできない、かっこいいボランティアになれている？！）

- ボランティアはイベントや企画の運営側であることを理解して、スタッフとしての自覚をもつ。
- 決められたルールを守る。
- 担当場所を離れる際は、必ずコーディネーターに許可を得てから移動する。

ボランティア参加者の声

「活動をとおして見えてくること・感じること」

このページではボランティアに参加する側の声を集めてみました。動機やきっかけは様々ですが、皆さんがどんな思いで参加・活動しているのかを知ることは、受け入れ側にとっても参考になるはずです。

名前：　宍倉麻友（19歳／大学生／NPO iPledge ボランティアスタッフ）

活動内容：　野外イベントでの環境対策（ごみ・資源の分別ナビゲート、リユース食器の導入など）

「高め合いながらスキルアップできる場」

2017年春に開催された「RED BULL AIR RACE」でのごみゼロボランティアに、ボランティアとして初めて参加しました。サークルよりもしっかりしたことに長期的に関わりたいと思ったことがきっかけです。実際に活動してみると、思った以上に多くの人と出会えてつながることができました。お金をもらえるわけではないし、一人ひとりが役割をもっているのが当たり前の場所なので、責任感の強いメンバーが集まっているような気がしました。自分ができないことをほかのメンバーが指摘してくれるなど、スキルアップできる環境があることも実感しています。受験勉強の合間にたまたま見ていたテニスをきっかけにスポーツ観戦に目覚めたので、東京2020大会ではボランティアに参加してみたいと思っています。

名前：　杉江 徹（55歳／会社員／A SEED JAPAN リピーターボランティア）

活動内容：　野外イベントでの環境対策（ごみ・資源の分別ナビゲート、子どもの体験学習など）

「事前準備で東京2020大会をよいものに」

30代の頃からボランティア活動に参加しています。阪神淡路大震災が起きて自分に何ができるか探していたところ、会社の人から環境ボランティアがあることを聞き、身の回りにも多くの活動があることを知りました。自分にとってボランティア活動は普段の肩書きに関係なく人に会い、対等に話せる場です。反面、時間やお金に余裕がないと難しいことも確か。やりたいことがあっても、ボランティアの立場上資金や時間の面で叶わず、もどかしい思いをすることもあります。東京2020大会ではボランティアに参加したいですが、参加方法などの情報が少なくわかりません。語学スキル、観光や宗教の知識、コミュニケーション力などボランティア側もきちんと準備して対応することで、きっとよいものになると思っています。

名前：　橘 かおり（22歳／大学生／NPO iPledge ボランティアスタッフ）

活動内容：　野外イベントでの環境対策（環境問題や社会問題に関連するブースの運営など）

「本当の自分を自分の意思で出せる」

高校1年の夏に留学を経験したことで学校以外の世界を見て、もっと何かやりたい、東京でも何かできるんじゃないかと思いボランティアを始めました。ボランティアは年配の方も多く、「若い人と一緒にできてよかった」と言われると、自分にも何か提供できるものがあると実感します。私にとってボランティアは、「本当の自分を自分の意思で出せる場所であり、自発性の塊でいられる場所」です。東京2020大会のボランティアには関わらないともったいない気持ちもありますが、ボランティア精神や外国人との接し方など、これをきっかけにみんなが変わっていくと思うと、どちらかというとそっちに興味があります。英語のスキルなども必要だと思うので、国際イベントというハードルの高さを実感する人も多い気がしています。

名前：　香川絵里（22歳／大学生／NPO 地域環境デザイン研究所 ecotone ボランティアスタッフ）

活動内容：　京都の市街清掃活動など

「やりたい仕事に就くためのシミュレーションの場」

私は将来、環境地理学の学者として環境NGOやNPOに関わり、環境についての正確な情報を人々に提供したいと考えています。学者になる上で研究の情報をより多くの人に伝えること、また人々が環境についてどのように認識し、活動しているかという現場を知ることはとても重要だと考えています。これまでに祭りやイベント時の環境対策活動、京都市へ提案する「グリーンイベントガイドライン改定案」作成のための情報収集や、ワークショップの企画などに参加しました。心がけていたことは、各セクターのベテランの方が参加する会議においても、臆せず自分の意見を伝えること。ボランティア活動における実践をとおして、将来の仕事のシミュレーションにつながれば、という思いで日々参加しています。

名前：　松山由実（19歳／大学生／NPO法人 ezorock ボランティアスタッフ）

活動内容：　大雪山国立公園旭岳での自然保護活動や「森のようちえん」など

「おもしろい！　楽しい！　が続ける原動力」

ボランティア活動に参加するようになって間もないですが、旭岳はとてもきれいな場所だということ、そしてNPOがボランティアを巻き込んで管理している事例は少ないと聞き、ぜひ参加してみたいと思いました。「森のようちえん」については森に興味があったことと、子どもが好きだったことが理由です。私の場合は「何かが変われば」と思ってボランティアに参加したわけではなく、自分の興味があることで単純に「おもしろそう」と感じたからです。ただ、実際に活動する中で感じていることは、自分の行動で少しずつかもしれませんが、今ある環境に関する問題を変えていけるかもしれないということ。特別に「ボランティアをしている」という感覚はなく、現場の人との触れ合いや活動が楽しいから続けています！

Message

キーパーソンからのメッセージ

ボランティアがつくる持続可能な未来

文教大学人間科学部准教授
日本スポーツボランティアネットワーク（JSVN）理事
二宮雅也さん

Profile
二宮雅也（にのみや・まさや）。1977年宮崎県延岡市生まれ。筑波大学大学院体育研究科修了。（株）北海道二十一世紀総合研究所研究員、上智大学嘱託講師などを経て2010年4月より現職。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ボランティアアドバイザリー会議メンバー、日本財団ボランティアサポートセンター参与なども務める。主な著書に『スポーツボランティア読本「支えるスポーツ」の魅力とは？』（悠光堂）など。

日本におけるスポーツボランティアの現状

日本には、多くの人がスポーツイベントを支えてきた歴史があります。市民の方々にボランティアという形での参加を最初に呼びかけたのは、1985年の神戸ユニバーシアードだといわれています。

その後1998年の長野オリンピック、2002年のFIFAワールドカップなど、大きなイベントでボランティアを運営に活かすケースが増えました。しかしどれも一度限りで、スポーツボランティアが文化として定着するまでには至りませんでした。

そのような中で、2007年から始まった東京マラソンは、必ず年に一度ボランティア活動に応募できる機会が用意され、ボランティアには専用のウェアや帽子が配られます。東京マラソンは、ボランティアとしての主体的な関わり方を提供するイベントになりました。こうした経験が、「ボランティアは楽しい！ また参加したい」と感じるボランティアの継続者を生み出すようになったのです。

ただ、東京マラソンでも過去にはランナーとして走れないからボランティアとして参加する人が多かったなど、ボランタリズム（公共・福祉のために自発的に協力すること）をしっかりともつ人が少なかった時期もあったのかもしれませんが、最近では周りを見ても相当なレベルでボランティア自身の意識が成熟してきたと感じています。

東京2020大会におけるボランティア

2020年に、東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京2020大会）がやってきます。東京での開催を成功させる、さらに海外からの観客に日本のよさを知ってもらうためにも、スポーツボランティアをもっと広めていく必要があります。

選手もボランティアも様々な国の人が参加する中で、競技は競争の世界かもしれませんが、オリンピックが平和の祭典であるならば、それを示すことができるのは協力して業務を進めていくボランティアの皆さんの活動です。海外から来る観客が空港に降りて最初に出会う大会関係者がボランティアの場合も珍しくなく、大会の第一印象を決めるのがボランティアといっても過言ではありません。

東京2020大会のボランティアは「大会ボランティア」（主に競技運営のサポート）と「都市ボランティア」（主に観客に対する観光や交通の案内）に分けられ、大会ボランティア、都市ボランティア合わせて約11～12万人となる見込みです。ボランティアとして参加するには語学力、体力、コミュニケーション能力など条件を挙げればキリがありません。しかし、こうした条件を前に諦めないでほしいのです。

確かに、組織委員会や東京都、各開催都市が募集するフォーマルなボランティアに採用されるには多くの条件をクリアする必要がありますが、実際にはフォーマルなボランティアだけでは補えません。長野オリンピックでは、インフォーマルに自治会が自主的に炊き出しのボランティアを行なうなどの事例もみられました。個人が無計画に展開することは様々な問題を引き起こす可能性もありますが、自治体やサークルが自分たちの特徴を活かし、行動計画を立てた上で所管組織の許可を得て、ぜひ前向きに活動してほしいと思います。フォーマルな組織では成功し得ない素晴らしい「おもてなし」が展開されるはずです。

以前テレビで、2012年のロンドン大会のボランティアをした65歳のイギリス人男性の特集を見ました。ボランティアを経験した彼が得た最も大きなものは、その後の人生の変化でした。オリンピックが終了したあとも、彼はスポーツに限らず新たなボランティアを次々と始めています。オリンピックでの経験を買われ、ボランティア責任者を任されることもあるそうです。まさにオリンピック・パラリンピック後の一つのボランティアモデルではないでしょうか。

一方で、スポーツボランティアはメガイベントを支えるためだけの存在ではないことも忘れないでください。地域での日々のクラブ活動や障がい者スポーツを支える人々もスポーツボランティアです。2020年をバネにするのは当然ですが、そこを通過点にボランティアを息長く育てることが大切です。

成功の鍵はマネジメントにある

オリンピック・パラリンピックを機にボランティアの継続的なモデルが構築され、持続可能な未来につなげることはレガシーとして非常に重要です。それには、継続的な機会の提供（情報提供）、ボランティア同士のつながりの強化（ボランティアバンクの構築と活用）、ボランティアコーディネートを行なう専門セクションの構築などが課題でしょう。

そういった意味では、すでに先駆的な働きをしている人たちが日本にもたくさんいます。私も理事として関わっているNPOの日本スポーツボランティアネットワーク（JSVN）では、リーダーからコーディネートまで養成する講習会を、年間とおして実施しています。ここで育ったリーダー、コーディネーターが東京2020大会の核になってほしいと考えています。

そして、リーダーやコーディネーターを含め、現場のボランティアの上に立ってマネジメントに携わる人たちのボランティアに対する認識こそ、東京2020大会成功の大きな鍵になります。

競技団体ごとにボランティアの活動内容は異なりますので、東京都や組織委員会と共に各競技団体がボランティアをどう認識するのか、ボランティアに対するリスペクトをどれくらい構築できるか。それによってボランティアのやる気が高まり、しっかりとしたパフォーマンスを提供できるようになります。ひいては円満な大会運営の形成にもつながる。これはスポーツに限らず、どんなイベントボランティアにも共通することです。こうした好循環をつくっていくための啓発は続けなければいけません。

そして最後に忘れてはいけないのが、観客側、つまり一般の我々もボランティアに対する認識を高めていかなければならないということ。それができれば、ボランティアは素晴らしいオリンピック・パラリンピックのレガシーになるのではないでしょうか。

Column

助け合いと究極のリサイクル。江戸時代の意識に見習うべきもの

江戸時代には、火事を起こさないよう町内の有志が集まり見回る習慣がありました。これは「まちを自分たちの手で守ろう」と自然発生的に生まれたもので、今のボランティアにつながる原型だそうです。また、江戸時代は鎖国の関係から、石油などの化石燃料がほとんどなかった時代。ものが少なかったために、灰や排泄物のようなものまで貴重な資源として扱われていました。消費と生産が持ちつ持たれつの関係だったからこそ、究極のリサイクルの環が回っていたのでしょう。このように、化石燃料をほとんど使わず、素晴らしい文化を発展させたのが江戸時代でした。経済発展こそあまり見込めなかったかもしれませんが、果たして物を大切にすると停滞してしまう現在の社会システムがよいのか。改めて考えてみる必要がありそうです。

ボランティア活動に参加してみよう！

すでに紹介した団体のほかにも、ボランティアを受け入れて活動している団体は多くあります。興味のある情報を探して、ぜひチャレンジしてみませんか？ 自分の意志で動くことを応援してくれる人や組織がきっと見つかるでしょう。以下は主な団体と情報源の一覧です。参考にしてみてください。

ボランティア活動に関する主な団体・情報源リスト

●全国ボランティア・市民活動振興センター

全国社会福祉協議会が運営する全国規模のボランティア総合拠点。

https://www.zcwvc.net

●東京ボランティアナビ

東京 2020 大会に向けたボランティアウェブサイト。

http://www.city-volunteer.metro.tokyo.jp

●日本スポーツボランティアネットワーク

スポーツボランティア文化の醸成、豊かなスポーツライフの形成を目指し、全国の団体のネットワーク化に取り組む団体。「スポボラ .net」では、ボランティアに参加したい人と求める団体等をつなぐ情報を提供している。

http://www.jsvn.or.jp

https://spovol.net

●「広がれボランティアの輪」連絡会議

全国でボランティア活動を広めるための関係団体のネットワーク。

https://www.hirogare.net

●日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）

大学生のボランティアを推進するために、災害ボランティア派遣や学生団体の支援、大学と協働での活動を展開している団体。

http://gakuvo.jp

●日本ボランティアコーディネーター協会

市民の社会参加を支えるコーディネーターの育成とサポートを行なう団体。

http://www.jvca2001.org

●環境ボランティアなび

環境保全につながるボランティアをしたい人のためのガイドブック。

http://www.geoc.jp/content/files/japanese/2017/06/kanvol2017.pdf

●activo（アクティボ）

NPO・社会的起業のボランティアやインターン、職員募集の総合サイト。

https://activo.jp

持続可能な未来をつくるボランティアのためのガイド
～ボランティアを受け入れるすべての団体の皆さんへ～

【発行】
地球・人間環境フォーラム
2018年2月

【企画】
SUSPON（持続可能なスポーツイベントを実現するNGO／NPOネットワーク）ボランティア部会

【ボランティア部会参加メンバー】
天野路子 ―――― 地球・人間環境フォーラム
太田航平 ―――― NPO 地域環境デザイン研究所 ecotone
草野竹史 ―――― NPO 法人 ezorock
斎藤亜季 ―――― 地球・人間環境フォーラム
崎田裕子 ―――― 持続可能な社会をつくる元気ネット
羽仁カンタ ―――― NPO iPledge（アイプレッジ）
星野智子 ―――― 環境パートナーシップ会議
宮腰義仁 ―――― A SEED JAPAN
山口記世 ―――― NPO iPledge（アイプレッジ）

【編集協力】
編集　　開　洋美
デザイン　川路祐介